

「念仏者の生き方」に学ぶ①

「門主さまが伝灯奉告法要初日に示されたご親教「念仏者の生き方」の中に、私たちの具体的実践として「和顔愛語」「少欲知足」の言葉があります。そこで、本願寺派総合研究所の満井秀城副所長にこの2つの言葉を解説していただきます。今言は「和顔愛語」です。

おだやかな顔 やさしい言葉

「和顔愛語」は、どう読むと思われませんか。「ワカンアイゴ」と思っている人もいるかも知れません。確かに「和顔」には「ワガ」という読み方もありますが、もともと仏教語ですから、仏教の読み方（呉音）で「ワカンアイゴ」と読むのが正解です。もともと仏教語だと申しましたのは、お経の中に出てくるからです。浄土真宗のお経では、『無量寿経』(註釈版聖典) 26巻(註)に出てきます。そのため、読み方も経典の読み方に従うべきです。意味についても経典

中の意味に従って理解すべきです。意味は、「おだやかな顔とやさしい言葉」(同26巻脚註)とあったのですが、問題は、『無量寿経』のどこにある言葉なのかとごまかしてしまっています。

法蔵菩薩の修行の二つ 完全には実行不可能

『無量寿経』は、浄土三部経の中でも阿弥陀さまのことが最も詳しく説かれた経典ですが、「和顔愛語」は阿弥陀さまが仏になられる前の、法蔵菩薩であったときの修行の一つとして説かれています。他者に接するときには、穏やかな

わ げん あい ごと 和 顔 愛 語

— 幸せの挨拶 —

表情で接し、つねに優しい言葉をかける生き方。

とても優しい生き方ですが、私たち凡人において、これを完全に実行することは不可能ではないでしょうか。落ち込んでいたりときや面白くないときには、不機嫌で無愛想な態度になりますし、腹が立ったり、イライラしたときには、人を傷つける言葉を投げかけてしまいます。また、優しい丁寧な言葉のようでも、打算にもとづいた二枚舌やおべんちゃら、その場を取り繕う嘘であったりと不実な心が表れたものに過ぎず、裏表があるのが私たちです。

しかし逆に、考えてみてほしいことがあります。イヤなことをされたら「この野郎」と拳が上がり、不快なものは毛嫌いして払いのけようとする私の手が、仏さまの前ではなぜか目と合わされるのです。また人の悪口を言うのが楽しく、愚痴ばかりこぼしている私の口から、「南無阿弥陀仏」とお念仏が出てくるのです。あるいは、困っている人を見かけたとき、打算とかではなく自然に優しい言葉かけられることさえあるのも事実です。

これは、どこから来ているのでしょうか。私の不実な思いからはありえない話で、ひとごと、仏さまのお育てによるものと考えられます。

阿弥陀さまの光 断えず私をお育て

その出所について考えてみると、『無量寿経』に説かれた、阿弥陀さまの四十八願の中では、第三十三願を「触光柔軟の願」と言い、阿弥陀さまの光に触れた者は、身も心も柔らかくなることとされています。では、阿弥陀さまの光に出遇った者は、どうして身も心も柔らかくなるのでしょうか。

え/ひじ みえ

阿弥陀さまの光について、『無量寿経』では「十二光」が説かれ、親鸞聖人も「正信偈」の中で、この十二の光をすべて挙げておられます。その内、「清浄光」は、清らかなお徳のこと、私たちの汚れた心(貪りの心)(貪欲)に向けられます。「歡喜光」は、真心のお徳で、私たちの怒りの心(瞋恚)に向けられます。喜んでいる喜びは、怒りは同

筆者
満井 秀城



1958年生まれ。本願寺派総合研究所副所長。司教。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。専門は真宗学。

時に起こりません。「智慧光」は、智慧のお徳で、私たちのおろかさ(愚痴無明)に向けられます。つまり、清浄・歡喜・智慧の光によって、私たちの「三毒」(貪欲・瞋恚・愚痴)の煩惱を治療してくださるということです。

しかし同時に、私たちは「煩惱成就」の身でもありますが、次々と煩惱が湧き起こってきて、さっさまで機嫌が良かったのに急に怒り出したというエピソードはしばしばです。そのため、「断光」として、「断えず」治療薬を施して下さるわけです。このような光に出遇うからこそ、不実な私の心が柔らかな心となり、穏やかな表情や心からの優しい言葉(和顔愛語)が生まれるのです。すなわち、「和顔愛語」の出所は、不実な私の側から出てくるのではなく、仏さまの側からのお育てによって起こることです。この点が、浄土真宗として「和顔愛語」を語る上で、特に注意しておかねばならないことだと思います。

「和顔愛語」の実践 自他ともに心豊かに

へんすあきら君とこう少年の詩

ありがとう

しあわせの

あひまひ

す

あきら君

とこう一節がありました。

「ありがとう」と言われたら、とても幸せな気持ちになれますし、「ありがとう」と言えるのは、その人が幸せだからと言えます。

「和顔愛語」も「幸せの挨拶」だと思えます。穏やかな表情や優しい言葉で接してくれたら幸せな気持ちになれます。そして、穏やかな表情や優しい言葉が掛けられるのも、その人がそういう身に育てられた幸せの証です。「自他ともに心豊かに生きていこう」と言える社会の実現に向け、「幸せの挨拶」として、「和顔愛語」を実践していきましょう。

(2025年5月20日)「少欲知足」